

Diploma Interview

総評

阿彦：最初に、卒業設計の総評や気になった作品など、卒業設計のお話をしていただいた後に、建築計画のことで、学生が気になっていることをいくつか質問させて頂こうと思っています。よろしく願います。まず、今年の卒業設計についての総評をお伺いしたいのですが、今年の卒業設計についてどのような印象を持たれましたか？

大原：今年はかなり制約があったと思うので、例年に比べて規模が縮小されているかと思ったんだけど、結構見応えがありました。例年と比べて感じたのは、図面がちゃんとかけている。それが不思議でした（笑）　そういう印象がありましたね。だから、しっかり実を取ったというか、印象よりもしっかりとしたものを残していった感じがあって。人によるけれども、卒業設計ってお祭りみたいなところがあって、終わると結構忘れるけれど、今年は割と形に残るものを作れたんじゃないかなと思いますね。模型なんてものはとっておくのが大変だから、そんなに残らないんだけど、図面はいつまでも残るし、そういう意味で、ちゃんと残るようなものを作れてよかったんじゃないかな。それは、コロナによる制約のおかげになって感じはするんですね。模型とかは大勢で体を動かして、人手をかけてやるわけけれども、それよりもきちんと形に残る方を、図面の方を書いていたのかなって感じがしますね。だから、よくやったと思います。内容に関しては、もちろん卒業設計はそういう傾向があるんだけど、自分の拘った場所に思い入れが結構強いってというのは感じました。その点は好感度が高い提案だったと思います。その場所をなんとかしようと思って、それもコロナの影響かもしれないけれど、全然知らないところに足繁く通うってことは出来なかっただろうから、割と身近でよく知っているところ、それなりに自分が愛着があるところを取り上げて、そこをなんとかしよう

という気持ちは伝わってきましたね。そんな感じの印象は残っています。

藤岡：自分も大体同じような感想で、特に真ん中の層が全体としてレベルが高くて、全体を底上げしているような感じがしました。理由はいくつかあると思うけど、一つは図面の密度がみんな高かった感じがします。例年、模型の方に力が集中して、図面が疎かになっていることがあったのが、今年は模型の方は本当に必要なところだけをしっかり作り込んでいて、図面の方に時間を割いて表現されていた。これが、おそらく全体として底上げされているという印象に繋がった一番大きな要因だと思います。コロナがどこまで影響したのかを少し心配していたのだけど、出来上がったものを見る限りは、色々大変な中で、プラスに働いている面もあったのかなって。決して制約だけではなかった、マイナスばかりの1年間ではなかったというのを感じました。

阿彦：例年そうなのかもしれないのですが、例えば去年だったら学校をテーマにした卒業設計がいくつかあったと思います。今年は学校や病院などといった施設をテーマにした作品がなかったと思うのですが、そういう、明確なプログラムを持つものを作らないという卒業設計の傾向について何か思うことなどはありますか？

藤岡：ビルディングタイプは、それぞれいろいろな考え方や歴史があったりするのだけど、やっぱり建築を種別で考えすぎると結果的に特殊な建築形態を生み出すわけですね。そこに関心や問題意識を持って、どう乗り越えていけば良いのかということを考えてくれる人は確かに例年いる。去年の学校をテーマにした卒業設計もそうだったと思う。これは、ごく普通の建築学生の反応だろうと思います。今年は河野さんが吉原賞で、日常のありふれた住宅地というか、日常生活をテーマにしていますよね。それが一番票を得たのが印象的でした。今年は多分コロナの影響もあってか、ビルディングタイプのようないわば特殊な建築形態よりも、ごく普通の、奪われ

た日常にみんなの関心が向いていたのかなと思っています。そうすると、ビルディングタイプを取り上げるよりも、もっと包括的で、総合的な方向に、プログラムとしても関心が向いていたというのは、僕は何かストンと腑に落ちた部分がありましたね。だからビルディングタイプをテーマとした卒業設計がなかったからといって、全然不満ではないです。学校がないとか、博物館がないとか、そういうことではなくて、今年らしいみんなの反応だったと思いました。

大原：そういう意味では思っていること、感じていることがこうなんだろうなっていうのはよく伝わってきたんですけど。一方でね、この時代に不満はないのかな、とは思。例えば、オリンピックとか（について卒業設計で）誰も何も言っていないよね。オリパラとかで、片やあいう国立競技場みたいなのがどんどん出来てしまつた中、アンチテーゼで何か表現するとか、そういうのもあってよかったなとは思いますね。こういう時代。だから、現代性みたいな、この数年の出来事とか、数年後に出来そうなことに対する反応があまりになかったかな。極めて日常的なところからの発想で。難しいけどね…。まあ、何人かいてくれてよかったかなとは思。うんです。健全すぎちゃって、今年。そういう派手そうなものは裏目に出ることもあるけどね…。そういう人はいなかったかな。だから、不満じゃないけどちょっと寂しかったっていう（笑）

藤岡：1964年のオリンピックの時もそうだし、震災復興の時もそうだけど、社会に大きな変化が起きる時に建築が道具にされることってあるじゃない？良い面ばかりではなくて、かなり暴力的な意味を持ち合わせていることもある。そういうところに敏感に反応して、どうせ変わるならこういう風になっっていく、という大胆で学生らしい提案は、今年は確かに見かけなかったかな。

視覚情報の重要性

阿彦：大きな変化がある時というお話がありましたが、現代のこのコロナの状況も社会の大きな変化であると思います。今年の卒業設計で学生からコロナを踏まえた案というのはありませんでしたが、そこそ今後の建築や、

建築計画の考え方の変化に関して何か思うことはありますか？

大原：例えば人が集まることをどう捉えるか、みたいなのはこの一年考えさせられることはあったよね。集まる空間とかには相当影響があるだろうな。ただ、コロナの心配がなくなった時にはまた元に戻るのかもしれないって考えると、進化するというステップに上がった感じはあんまりしないんだよね。何か変わってもらうといいんだけど…。研究的には、たまたま今年は横浜の周辺で坂の多い敷地の人も結構いたと思うけど、僕らは坂の多い住宅地なんかで高齢者の問題を研究していて、家にかかるまでの階段の段数は7、8段くらいで外出への意欲だったりが大きく違ってくるんですよ。7、8段というちょうど目通りから背の高さぐらいまで、地面が自分の目の高さより上にあると明らかに壁になって見えてくるというか。今まで建築計画では、筋力計がなんかつけたりしてどれぐらい体に負担があるかとか肉体的、身体的に空間を単純に計測するってことはよくやられていたんだよね。今の階段のこたななんかは環境情報であって、そういう情報って自分が体験する空間以上にメッセージを与えているんじゃないかなってことに最近反省というか、気がつき始めて。視覚情報っていうのも建築の重要な要因というか、人の行動を変えるのに重要な要因んじゃないかなって感じましたね。うちの大学に限らず、コロナで視覚的な部分とか表層的な部分、外観みたいなものへの関心がだいぶ高まってきていて、それまでは触ったり感じたりっていう実際に行ってみての体験の方が強かったのが、今は情報の獲得の仕方が視覚だけに頼ろうっていう方へシフトしてきたと思うんですよね、コロナの制約の中で。視覚情報の重要性というのは改めて感じているところですかね。まだ誰にも言ってないんだけど、聞かれたので（笑）

一同：（笑）

藤岡：今の話に続けるの結構難しい（笑）

阿彦：すみません、変な質問で。

藤岡：いやいや、みんな気になっている話題だからね。コロナが建築とか都市、あるいは学びにどんな影響を与

えるのかっていうのは。僕もわからないですし、なぜならまだ災害の真っ最中だから。今大原先生がおっしゃったことも確かに感じていて、これまでのコミュニケーションは、相手の表情とか、どのくらい距離をとるかも情報の一部だったじゃないですか。文字のやりとりだけではなくて、周辺にある情報も含めてコミュニケーションが成立していたのが、文字以外の部分が全部削り取られて、画面越しの情報だけでコミュニケーションを取らないといけなくなってしまった。こういう制約が、人間の視覚とか感覚に相当負担をかけているだろうし、一方で敏感にさせている側面もあると思う。長期的にどのような影響をもたらすかわからないけど、あらためて視覚などの感覚から得られる情報の重要性を感じたのは確かだと思います。オンラインの作法とかよくわからないマナー講座まで生まれているし、不思議な感じですけど、それだけみんな視覚情報あるいは視覚が与える自分の印象についてすごく敏感になった一年だったと思います。もう一方で、建築や都市にどういう影響を与えるのかってことをずっとぼんやり考えていて。僕が思っているのは、影響の大きさは災害のインパクトの大きさと災害の続く時間の掛け算だとすると、コロナがもたらす影響はかなり大きくなるだろうということ。たとえば東日本大震災などの大規模災害は、自然災害そのものは限られた時間軸で起きていた。だから、被害は大きかったけれど早い段階で復旧・復興に切り替えることができた。コロナは災害のインパクト自体はそれほど大きくない。でもインパクトが大きくなって、長く続く災害を、私たちはあまり経験したことがない。こうなると、災害が通り過ぎたあとに日常に戻る、その「日常」そのものが変わっている可能性が十分にある。数年後に振り返った時に、コロナの前の日常とコロナの後の日常が違うものになっているかもしれない。それはきっと遠からず建築とか都市に必ず影響を与えることになる。今でも郊外に移住し始めている動きもあるぐらいだからね。テレワークが選べるようになれば地価の高い人口密集地にわざわざ住まなくても良いという理由で。日常そのものが変質して、建築とか都市を人々のニーズの根本から変えていくのになって思っで見えていますね。大学も大きく変わるかもしれない。オンラインで授業のアンケートを見ていると意外にオンラインでも良いという声も多い。キャンパスという空間にみんなが集まることの意味ってどこまで大事だったのだろうとか。まだ全然答えはないんですけど、キャ

ンパスデザインのあり方とか、学校建築のあり方とかも変わっていくかもしれない。たとえば、僕は横浜の震災復興建築の研究もしているのだけど、占領軍に関内から追い出されたあと、しばらくして土地が返還され始めても避難先で生活が根付いてしまい戻ってこない人もかなりいた。つまり、戻るべき日常が一体どのようなものになるのかは、これからどれくらいコロナが尾を引くにかかっている。とにかくどうなるかわからない。まだ災害の終わりが見えないから。でも、そういうことをちゃんと流されずに、自覚していればひとまず大丈夫かなと思います。

阿彦：日常が変質するっていう根本の話は今のお話聞いて確かにって思いました。個人的には学棟が使えない時期とかはすごく苦しかったです（笑）オンラインだと、自分から行動しないとか何も発生しないし、偶然些細なコミュニケーションとかから何か生まれるってことがないので。

藤岡：オンサイトの良さだよね。ここにくればみんながいて、直接のやり取りがなくても、たとえば隣で作業している様子が偶然視界に入ってきて、そのことに触発されて自分もやる気が出るみたいな。隣のグループのピンナップを見てそれをヒントに自分の考えを深めるとか。そういうのはオンサイトならではの学びの形だよね。建築の学びはそういう環境がないとなかなか深まらない。個人作業だけではなくて集団で成長していく部分が大きい分野だと思う。だから、みんなもストレスが大きかったんじゃないかなと思います。

観察、省察、考察、洞察

上田：今回コロナっていう状況もあってリサーチというか、実際に敷地に訪れてその場所を感じ取るっていうのが十分にできなくて、評価する軸がすごく限られていた気がするんですけど、逆に設計する上で敷地とか活動を分析することってすごく重要だなって改めて感じました。研究者であるお二方の立場からして、卒業設計での研究やリサーチという側面から何か思うことがあればお伺いしたいのです。

Yasuhiro FUJIOKA

1997 京都大学 工学部 卒業

1999 京都大学 工学研究科 環境地球工学専攻 修士課程修了

2011- 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究員准教授



Kazuoki OHARA

1981 横浜国立大学 工学部 建築学科 卒業

1983 横浜国立大学 工学研究科 建築学専攻 修士課程修了

1987 東京大学 工学研究科 建築学 博士課程 単位取得満期退学

2011- 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究員教授

大原：…(笑) 基本的なことはあまり言いたくないんだけどね(笑) リサーチという面で言うと、この日本の社会の中でいろいろ動いている現実というのがあって、そういう情報を集めてその場に行って感じられないというのが大きいんだけど、ネットの情報だけだとすごい表層的になってしまって、他の地域でも同じようなことやっているのに、っていうのは結構あるんだよね。そういう情報で本当に問題になってそれをクリアするためには建築で何が必要なのかをもっと考えた方がいいのになあ、惜しいなあと思った。卒業設計ってそこらへんはあまり深くできないもので、この課題に対しての実態とは何なのか、他の場所でこうやって困っているということが分かるまでには結構な時間が必要で。そんな感じのことで終わってしまって卒論とかでまとめるのもよくある話。そして、リサーチをもとに設計するっていう次のステップまで持っていくことは相当大変なこと。時間的に難しいんじゃないかなって思うんですけど。でも、逆にリサーチすることの重要性っていうのはみんな感じて、足りなくなっているながら設計をまもっていたと思う。実際の建築の設計だってそうでね、もっと時間があれば色々なことが分かった上で設計できたのっていうのはしょっちゅうあること。だからそれは今年の制約みたいなのはあるかな。大体世の中の活動って、口コミでしか情報って入ってこない。同じ思いを持っている人は世の中にはいっぱいいて、あるとき出会う。それで初めて分かるということが多い。発見というか、出会うまでには時間とチャンスもたくさん必要だと思う。なかなかそれは難しくて、やろうと思ってできることではない。今回の卒業設計でも、日常的なものを扱っているが故に、結構あちこちでももうすでにやってるじゃんというのが多かった。

藤岡：求めるとキリがないけど、ここ数年続いている良い傾向だと思うのは、梗概をしっかりと書いて、参考文献をしっかりと載せて、こういうところに自分は興味があって目を通したっていうのを主張していること。以前は、梗概の2枚目の左側で終わってた人もときどき見かけた。最近はちゃんと2ページ最後までしっかり書いていると思う。ただ、参考文献もまだメジャーなものが多い印象で、一次情報というよりは、誰かが考えてまとめた二次、三次の情報だったりするから、以外と表面的。でも良い傾向であるとは思う。できればもう一歩踏み込んで一次情報に触れる。100人中99人が言うことは本にまとめて書かれているけど、残りの1人がこんなこと言っていないずっと心に引っかかっている。本を読んでもどこにも書いてない、というような。それを設計テーマにしようとか、あってもいいと思うんですね。そういうのって、自分で現場に入り込まないと触れられない。卒業設計に取り組むリサーチの段階で、経験できると良いと思う。ただ、今年はコロナであまり強く求められなかった。建築計画の吉武泰水先生は建築計画「学」ってあまり言わなかった。建築計画または建築計画研究という言い方をされていた。吉武泰水先生ご自身は建築計画分野の黎明期にあって、まずしっかり観察することが大事だ、そこが入り口だ、そこから学び取ることが大事だっておっしゃっていた。観察の次に考察、省察、洞察。そこ(洞察)までいったら学問になるかもしれないとおっしゃっていた。そういう意味でまずしっかり自分の目で観察することから始まる。建築は一度建てると100年、200年残るものになるので、感覚的に作るわけにはいかない。社会的責任の伴う仕事。作る側がしっかり考察して省察して、できれば他の人の考えにも関心を持って、自分なりの洞察に結びつけていくっていう思考のプロセスが、研究に携わる人だけでなく、デザインに携わる人にもすごく重要なんじゃないかなと思います。簡単では

ないけれど、少なくともそういう目標があるということとを、分かっているか分かっていないかの差は大きい。足らざるを知るといつか、まだまだ考えなければいけないことが残っているというのを分かった上で、今出来る精一杯で取り組んでくれるといい。

どれだけたくさんのパラメーターを引き受けるか

阿彦：もう一つ卒業設計について聞きたいことがあって、たぶん去年の卒業卒業設計のインタビューなのかもしれないんですけど、全体的にすごい平面的な提案が多いっていう話をされていて。今年は例えば永長くんのとワーマンションの提案だとか。立体的だったり断面を考えている…

大原：それもあつたし、敷地が斜面とか高低ある敷地を選んで人多かったよね。そういう意味では平面的だけじゃないように感じた。去年と比べてどうなってるか僕にもよくわからないけど。だから逆に言うと今年は別に平面的だなとは思じなかった。それと、卒業設計に限らず3年生ぐらいの演習の時なんかに平面的だって感じているのは、二次元でいろんなこと処理しちゃって終わっている例が結構多くて。あとは屋根をかけるだけのような提案。プランニングっていうとそこじゃなくて、もう少し縦(垂直)の関係を大事にしていっていう。三次元になると難しさも増えるんだけど可能性も増えていくわけだね。二乗か三乗かでだいぶ数が違ってくるわけだから。元の数が増えれば増えるほど三乗で効いてくるっていうのはすごく複雑な形になってくると思うし、そういうのを意識してやってる人がいたわけではないかな。高い建物はもちろんあつたし、斜面地ももちろんあつたけど。せっかくそういうところを突いてくれたんだけど、僕は今年はそういうところに関しては可もなく不可もなくっていうか(笑)

藤岡：そんなに気にはならなかった。どれだけたくさんのパラメータを自分の卒業設計で引き受けようとしているか。表面的に見えてしまう提案というのは、引き受けたパラメータの数を自分で最初から少なくしちゃってるところが伝わっちゃうので、目立つんですよ。特に卒業設計のような最後の発表の場だとなおさら。それなりにままとまって書かれているけど、残りの1人がこんなこと言っていないずっと心に引っかかっている。本を読んでもどこにも書いてない、というような。それを設計テーマにしようとか、あってもいいと思うんですね。そういうのって、自分で現場に入り込まないと触れられない。卒業設計に取り組むリサーチの段階で、経験できると良いと思う。ただ、今年はコロナであまり強く求められなかった。建築計画の吉武泰水先生は建築計画「学」ってあまり言わなかった。建築計画または建築計画研究という言い方をされていた。吉武泰水先生ご自身は建築計画分野の黎明期にあって、まずしっかり観察することが大事だ、そこが入り口だ、そこから学び取ることが大事だっておっしゃっていた。観察の次に考察、省察、洞察。そこ(洞察)までいったら学問になるかもしれないとおっしゃっていた。そういう意味でまずしっかり自分の目で観察することから始まる。建築は一度建てると100年、200年残るものになるので、感覚的に作るわけにはいかない。社会的責任の伴う仕事。作る側がしっかり考察して省察して、できれば他の人の考えにも関心を持って、自分なりの洞察に結びつけていくっていう思考のプロセスが、研究に携わる人だけでなく、デザインに携わる人にもすごく重要なんじゃないかなと思います。簡単では

大原：もともと建築は理系と文系の中間というか両方合わさったものだと思うので、都市科学の特徴っていうのが文理融合ということだとすると、建築でずっとやってきたこととあまり変わらないのじゃないかという感じがあるけどね。建築っていう概念も、その対象をビルトインバイロメントって言ってみると、広く都市を構成する色々なものが全部建築の分野に入ってくると思うので、都市科学っていうのは建築学の必然的な広がりんじゃないかなと思うんですけどね。

藤岡：都市科学よりも建築学の方が上位の概念ということなのかもしれないね。

一同：(笑)

藤岡：都市の対極にある農村を都市と対比させて考えてみると、都市は農村がないと成り立たない、でも農村は都市がなくても成り立つ。そうすると都市っていうのは非常に幼い発展途上の状態で、リスクのコントロールも含めてまだいろいろやらなきゃいけないことは多いんだろうと思います。だから都市科学という何か確立された学問分野が先にあるわけではなくて、我々が生きていくために都市を科学していかなければならない、と。そういう切実さがきつとあるんだろうなと思います。

大原：都市科学って言っちゃった時にルーラルの話をネグっちゃってるんじゃないかっていう心配は常にある。さっき言われたように都市だけ単独では成立しないので、都市科学って言った場合は、当然周辺とか農村とかを含んでいるんだろうなと。人新世じゃないけど、別の世界も含んでいるっていうことで考えていかないといけないくて、都市科学が分野としてセパレートされちゃったらそれは駄目だと思います。都市をきっかけにしてもう一度社会を考え直すっていうのが都市科学なんだろうから、最初から領域を狭くしちゃ意味がない話だね。都市科学部っていうことと建築学科っていうことで言うと、建築学科に入りたいうって思って入ったんでしょ？

学生：はい(笑)

コミュニティはつくるものではなく、あるもの

阿彦：話がまた変わっちゃうんですけど、よく学生が設計課題や卒業設計をやっていく中で、コミュニティという言葉をよく使うと思うんですけど、コミュニティって多用してしまうんですけど、すごいふわつとしたような気がしていて、それは共同体なのか単に集まって喋るような集団のことを言っているのかとか、建築の中の分野によっても、色々捉え方があると思うんですけど、建築計画をやっているらっしゃるお二人としては、コミュニティとものをどういう風に捉えているのかというのをお聞きしたいです。

大原：ええ…(笑) なんて言うかな、僕はコミュニティのあり方自体は、食べることと寝ることと同じように、人が生きていく上では大事なことだ、ぐらいの感じで、そんなにこだわりとかない。必要なものだと思っているので、もちろん、コミュニティの形はいろいろあるだろうと思う。けども、何らかの形で人と交流をするっていうことだけを起点として捉えれば、どうしても必要なことだと思うし、あまり思い入れはない。普通のこととしてと、うか、空気のように必要なこととして捉えている。

藤岡：ちょっと分かりやすく言うと、個人と全体との中間にあるものが、共同体すなわちコミュニティだと思うの



で、中間の状態だから、レベルはいろいろある。小さな共同体から大きな共同体までさまざま。スケールの問題もあるし、アイデンティティの問題もある。アイデンティティには、イデオロギーのようなものもあれば、スピリチュアルなものもある。とにかくいろいろあって、コミュニティは単一のものではなくて、個人と全体との中間にあるものは全部コミュニティとして理解すればいいんじゃないかな。高齢者の研究に関わると、人間は1人では生きていけないと切実に感じる。生まれてすぐの乳幼児もそう。でも、20歳前後の学生の年齢は身体的にも充実していて、1人で何とかなっちゃう時期。だから、コミュニティの必要性はそこまで切実に感じないだろうし、そういうのを感じなくても生きていける時期だと思うんです。けれど、生まれてから死ぬまでの長い時間軸で考えると、コミュニティは自分の生存に関わる存在で、これまでも当たり前のように在ったし、これからも在る、必要不可欠なものとしか言いようがない、と思います。

阿彦：設計のテーマとかを考えていく中で、"こういうコミュニティを作る"という提案をすることもあると思うんですけど、設計課題をやっている学生は、コミュニティは作るものというふうに理解してしまっている気がしています…。

馬場：(コミュニティという言葉を) やんわり使ってしまうけれど、いまいち捉えきれてないというのはあると思います…。

大原：僕の後輩で黒野っていうのが新潟大にいらんだけれど、黒野が言った名言が『コミュニティは作るものではないでしょう、あるものでしょう。』というのがあって。僕もそう考えているよ。コミュニティデザインっていう言葉を最近よく聞けれど、コミュニティはあえてデザインされる対象ではないんだと思う。だから、コミュニティデザインっていう言葉自体おかしいなと感じていて。作ろうとして作れるものではないんだよね。建築もそうだけれど、生活ってできていくもので、誘導したりこの方が使いやすいっていうことで導いてしまうのが建築の宿命というか…。本当はそういうことをやりたくないと思うんだけど。つまり、どんな使い方もされることが素晴らしい建築なんだと思うんだけど、建築というのがやはり作ってしまうと、生活を束縛するところがあって、そこで出来上がってくる生活はデザインされた生活かっていうと…。そういうところにデザインって言葉を使ってはいけないんじゃないかと思うんだよね。制約ということであって。だから、コミュニティも自然と出来上がっていくもので、それは自由であっていいだろうし、仕向けるとか何とかっていう話は、なんとなく建築計画の人はあんまり好きじゃないみたいな感じがするんだけど、どうですかね？(笑)

藤岡：コミュニティデザインという言葉はあまり使いたくないという感じは僕もあります。例えばさっき言った"個人と全体の中間にコミュニティがある"と考えたとき、建築を計画する、デザインする立場の人が、コミュニティのために先手を打っておかなければ、ますます個人が危うい立場に追いやられる、ということが起こりうる。プロジェクトとしては成立させながら、でも少しずつ面積をやりくりして、誰でも使えるような場所を捻出して作り込んでおくとか。こういうことは建築の専門家にしかできない仕事だし、コミュニティに対する大事なアプローチだと思います。一方で、コミュニティは動的なものだから、なにかこれといったビルディングタイプと結びつくよ



うなものではない。たとえば、子ども食堂を作ろうと思うても、これを守ればできる、というような共通の設計条件があるわけでもない。現実社会では個人宅の1室が使われていたり、空き店舗が使われていたりすることも多い。ただ、こうした子ども食堂は、基盤としては弱くて、持続性に課題が残る。持続性という点から、空き家や空き店舗で子ども食堂を実現しやすくする工夫、つまり、用途変更のハードルを制度的に緩和したりすることも大事。言い方を変えると、法制度が邪魔しないような環境を整えていくということ。コミュニティに対する専門家の役割は、そういうところにもあるのかなと思います。

一同：(笑)

藤岡：逆に聞きたいけれど、どういうニュアンスで使っているの？(笑)
馬場：3年生の設計課題の時、集合住宅の課題を見て

「開く」ということ

いただいたと思うんですけど、地域に開かれたというふうに所々で指導されるじゃないですか。そこで、地域に開くということを考えたときに、この段階でコミュニティという言葉が出てくると思います。それで、よくわからないまま使っていて、さらによくわからなくなっていく…(笑) 集合住宅の課題の時に思ったのは、地域に開くってなったとき、コミュニティデザインということがないのだとしたら、ここで言う地域に開くというのは一体何なのだろうか、と思います。

藤岡：地域に開くという表現でみんなが考えるのは、敷地を起点として、そこから周りに向かうベクトルのことだよね。でも、周リから求められて(人が)来る、つまり、開くというより開かれていくという逆のベクトルもあるよね。それも結果的に地域に開くことだとすると、双方向で考えてほしいと思うんです。みんなどうしても、まず敷地があって、(そこに建築を)新しく作り出すことによって、何かが変わるっていう、割と一方通行なベクトルでしか思考が回っていないような気がする。今言われて気がついた(笑)

馬場：多分、そうです。

藤岡：周リから要求された必要なものになれば、建築はちゃんと使われていくはずで、きちんとメンテナンスされて長く使い続けられていく。そういう、確認とかエビデンスというか、周リからの要求に気を配りなが

ら建築を考えていってほしい。中から外を考えるだけでなく、外から中を考える、相互の応答の中でデザインを組み立てていけば、結果的に開かれたものになると思う。

大原：あえてここ数年課題でも言っているのは、住宅って一般的には私有財産で、一般的には閉じているもので、プライベートなものだっていう前提から今、いろんなそうじゃない試みが出てきて、それが地域にも求められているということで、あえて開くって言っている。課題で開くって使うのは、たぶん、地域と関係を持つという事に関して、あえて言わないとみんなそいう意識を持っていないだろうと思って、課題の中に(開くっていう言葉が)入っているんだと思うよ。本来住宅というのは、社会的な存在だし、閉じていること自体が本当はおかしいのだけれど、今の現実からすると、閉じているのが普通だと思われているので、あえて課題では言っているのかな。だから、そんなに無理することはないと思うし、開くというのは閉じているから開くというのであって。「住み開き」という言葉、アサダワタルさんが自分の言葉のように言っているけれど(笑) そのせいであまりにも有名になってしまって、僕らは「住みつなぎ」というふうに言ってるけど、こっちは全然流行っていないんですけど(笑)「住み開き」のほうがわかりやすいし(笑)。要するに、今閉じているから開くという感じで使われている。それはつなぎ方の1つ。だから本当は住みながら周りとながつながっていくということが目的なんですね。「住みつなぎ」っていう言葉は、宣伝するわけじゃないけれど、時間的なつなぎ方、世代継承みたいなものも概念の中に含まれるので、そういう形で考えればいい。社会と住宅は一体のものだったり、つながっているということなんだよね。本来そういうものであってほしいという思いが、課題の中には入っている。まあそういう提案も結構あったよね。住み開き的な。世の中もそうなってきているしね。

藤岡：今年の春学期の「居住空間の計画」の講義では、例年民家園などに行ってもらう課題ができなかったもので、仕方がなくアニメの中の住宅、サザエさん家、ちびまる子ちゃん家、ドラえもんの家を調べて比較する、という課題を出しました。Amazonプライムが1ヶ月無料の間に见てもらって、間取り分析をして、どの家が自分にとって一番暮らしやすいと思うかを考えてもらう課題。面白かったのは、建築の学生と、建築以外の学生で評価が分かれたということ。建築の学生は圧倒的にサザエさん派が多かった。それで、都市社会共生の学生などはドラえもん派が多かった。二階にプライベートな部屋があるのが良いし、縁側とか面倒臭いですって感じて…。同じ二十歳ぐらいの学生でも、興味関心やそれまでの



生活体験によって、開くということに対する価値観が割と違うんだなっていうことに驚きました。昔ながらの縁側のように、プライベートとパブリックが、緩くつながっているような、そういう空間原理に潜在的な関心を持っている人たちが建築学科に入ってきているんだというのを確認できたという体験をしました。住み開きも、社会一般で普遍的なアプローチになるかっていうと、きっとそうではなくて意識の高い人や関心の向いている人から始めていって価値が広まっていく類のものだと思います。だから、設計課題ではうまく消化できなくても、興味関心を大事にとっておいて、社会に出たときにまた別の機会に続きを考えてほしい。そのときに、またゼロから考えなくて良いというのがアドバンテージになると思うし、課題で消化できなくても10年後に引き出しから出して活かしていれば十分だと思う。そういう意味では、課題を通じて考えたこと自体に意味があるって思えたらいいんじゃないかと思います。

藤岡：建築学科の学生は絵に描いたように「縁側は素晴らしい」「こういうのはもっと現代に回復すべきだ」って書いてあるものが多かった。都市社会共生や都市基盤の学生の方が素直なのかもしれませんね。

大原：使命感なのかもね。建築の専門家として作っていかないといけないもんね。

藤岡：そうかもしれませんね。ドラえもんの家って答えたらいけないと思っているのかもしれない。

馬場：設計課題で縁側みたいなのが作れなくなっちゃう…。



阿彦：授業で言われている「脱施設」についてお話をお願いしたいです。

大原：「脱施設」は、「脱」なので、反とか否定するとかっていうことももちろん含んではいるんだけど、それだけではなくて、施設というのにとらわれないという考え方です。だから、施設というビルディングタイプというのは、当てにしたり、頼りにしなくても良いものだと思います。仮の計画概念というか、それがあるとわかりやすいので、便宜的に近代に作られてきたものだろうなと。もっと基本的な考え方、建築を行為で見るだとか、空間で見るだとか、一回分解して考えれば施設という存在は必要ないんだと思うんですよね。それは違うって人もいないと思うけど、現実には施設が作られ続けている…。効率性だとか、制度ってものがあるので、しょうがないんだけど、空間として別に一つの塊として自立するものを作らなくても良いんだと思います。わりと卒業設計でも普通にそういう提案はあるでしょ？地域全体でいろんな機能を持っていけば良いんだっていうもの。建築の表す意味っていうのは単体の建築物、建物っていうのじゃなくて、行われている行為や機能とかそういうものも含めて、全体が建築なんだっていうふうに考えれば良いというもの。「脱施設」っていうのは、そういう基本的な考え方で、特に深い意味はない。ただ現実には難しい。制度の壁を崩していくことはすごく難しいので、それを少しずつ変えていくっていう実践がすごく重要かなと思います。

藤岡：山本理顕さんの言う「脱住宅」も脱施設の考え方のうちの一つ。住宅もビルディングタイプのひとつとされてしまっているから、そこから出発せざるを得なくて、そこからいかに脱するかっていうアプローチ。一大家族一住宅を超える、血縁家族ではない人たちと一緒に住み合う、そういう選択肢を広げていくもの。

大原：住宅が施設になっちゃっている今の世の中がおかしいっていう。

藤岡：「脱」っていうのは、パラダイムの大きな変化・シフトのことで、こっちが正しいって思っていたが、そうではないってことを言っているに過ぎなくて。「脱」の先に、どういう建築や制度があるのかについては様々

だから先に答えを探そうとしたらダメだよ。自分で考えなさいってことだから。でも、ヒントはたくさんある。現場で、むしろ専門家じゃない人たちによって、制度を乗り越えるような取り組みはあちこちで起きている。そういうヒントから着想を得て、建築や制度に結びつけたりすることは大事だろうと思います。

阿彦：最後に、卒業生に一言いただけますでしょうか。

大原：特別な年なんだろうけど、特に特別にならずに頑張ってください（笑）もちろん、特別な体験をしたと思うので、それを自分の良い方向に活用して、決して負の遺産やマイナスに捉えない方が良いと思います。外から見ると特別なんだけど、これまで先輩がやってきたことや、これから後輩がやることと同じように、ずっと続いているこういった建築学生の宿命っていうのがあるので、それを全うしてください。

藤岡：やっぱり大きな変化にはあらがっても仕方がないから、そこから学ぶということもあるという気持ちでやってほしい。君たちが社会に出る頃はもうコロナの前の社会ではないだろうし、君たちは学生時代にリアルタイムでコロナを経験している世代。もっと後の世代になると、コロナの後に入学してくる学生もいる。コロナと併走しながら学びを獲得して、社会に出ていく世代固有の価値観がきつとあると思うから、経験や価値観を大事に、これからも頑張ってくれるといいかなと思います。でも、建築学生として変わらない部分もあって、同窓会などの縦の繋がりは大事にしてくれるといいなと思っています。

一同：お忙しい中、ありがとうございました。

（聞き手）河野、馬場、上山、上田、阿彦、永長